

大人になってゆく子ども

長女を見つめて

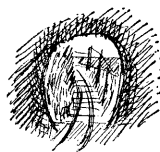
○僻地の保母になりたい

高校進学を前に、中学校では、将来の目標を立て、目標に向っての高校選択をするようにと指導がある。長女は「僻地の保母になりたい」と言って私を驚かせた。

中学二年生の頃、それまで『赤毛のアン』の「アン」シリーズが愛読書で、モンゴメリの著書だけは全巻揃えて大切に並べてあった彼女の本棚に、何か場違いな感じで、『橋のない川』が一冊立てかけてあるのが目についた。

それが、いつの間にか全六巻と並び、モンゴメリは、部

飯嶋日出美



屋の隅の本箱にと移されてしまっていた。島崎藤村も追加されていった。

不自由ということが、ひとりで映画を観に行くことを禁止されていることであり、流行の衣服をすぐには買ってもらえないことであり、テレビをいつまでも見ていたい時に勉強しなければならぬことであったりと、その程度でしか認識していなかった娘にとって、『橋のない川』が与えた衝撃は、大きく激しいものようであった。

「僻地の保母さんになりたい」と言い出したのは、それから間もない頃であった。恵まれない子どものために働きたいと言うのである。

この頃から、小学校六年以来続いていた、反抗的ないらいした態度は幾分和らぎ、大人の立場への理解を示す余裕もでてきたように思われる。だからといって、青年前期ののもやもやした不安は、一気に解消されるようなものではない。私に教育ママだと当り散らしたりもする。有名校に進学するようにと勉強を強制しているわけではない。普通の高校に進学するための普通の努力ならできるでしょと言っているだけのこと、それだからこそたまらない重圧になるのかも知れない。人並の努力ができないのではないかという不安は大きい。「私には何の取柄もない。魅力もない。能力もない。みんなが馬鹿にする。勉強をしなくてはと思うのに能率があがらない。他の人に解ける問題が私には解けない」等々自己批判と自己嫌悪のありつたけを並べ、とっさには返事もできずに、当人以上に深刻に悩んでしまった母親をしり目に、さっさと眠ってしまった夜もある。

「恍惚と不安我にあり」と、分つていても心配なのが母親で、それだからといって、唯話を聞く以外にどんな助力ができるだろうか。「あの本の中に……」とか、「私も学生の頃……」と、その年頃の揺れ動く不安が、彼女だけのものではないことを話して聞かせる位が関の山だ。私はその折々の娘の

目を忘れることができない。素直に相槌をうちながらも、その目は、「私の悩みはそんなものではない」と語っている。誇り高き青年期なのである。

この時期、彼女が書を読むことによって得た慰めは大きく、書はどれほど彼女の師となり友となったか。また、「僻地の保母になりたい」と思うことが、彼女の果しなく抽象的に脹らんでゆく悩みを引き止め、地に足をつけて歩んでゆく人生への現実的な努力へと変えていったのではないだろうか。

○おねしょと指しゃぶり

その頃、彼女のことを考えていると必ず心に浮かぶ幼児期の出来事があった。或る夜、私は娘にこの話をし聞かせ、「だから、きつと、二人とも疲れて、なんとかなるさ」と聞き直ったとき、あなたはあなたの力で飛躍してくれると思うわ」と言った。

その(一)は夜尿のこと、と言っても夜尿症のことではない。夜の排尿習慣の自立のことである。昼間に関しては、教科書

通り一年八か月頃に、おむつを外すことのできた長女が、夜間については、なかなか思うようにいかなかった。二歳七か月頃、夜も、思い切っておむつを取ってしまった方がよいのかも知れないと、おむつを止めてみたことがある。その結果、夜間に一度ではなく、二度から三度の排尿があることが分った。一週間続けてみたが、母娘共々睡眠不足でふらふらになってしまったばかりで、何の成果も見られなかった。またおむつに逆戻り。私は毎日のように、なにかよい方法はないかと思案し、三歳ではまだ夜尿症ではないと慰め、大人になるまでにはなんとかなるでしょうなどと、無責任に自棄な言葉を口にしたりもした。

三歳の誕生日も過ぎた或る夜、寝巻に着替えるのを手伝っている、娘が、「○○ちゃんも○○ちゃんもおむつしないんだって、だから私もしない」と言いだした。夜中に何回も起きなくてはならないかも知れないが大丈夫かと聞くと、大丈夫だと答える。それではと、寝室は二階にあったので、夜中に階下のトイレまで降りるのは危いからと、廊下で便器を置き、おむつを止めた。その夜の不安と期待を忘れることはないだろう。

娘は、その夜以来、夜間も排尿には自分で目を覚まし、自

分で用を済ませ、その数も一日一回から、二日に一回となり、次第に夜間は起きなくてもよいようになっていった。

その(二)は指しゃぶりについて。長女は、いつの日からか、「ネンネ」と称する毛布を右手に持ち、左手の中指と薬指をしゃぶるのが眠くなったときの習慣となっていた。ライナー・スタイルである。このため、中指と薬指には「タコ」ができていた。旅行に出るときも毛布を忘れることはできなかった。だから、はじめWサイズであった毛布もいつの間にかベビー毛布サイズとなり、度々の洗濯に、色は、家中で「ピンクのネンネ」と言わなければピンクとは分らないほど色褪せていた。それでも娘にとっては、大切な大切な「ネンネ」であった。私は、「指を口に入れるのは止そうね」と、時々気弱に声をかけるばかりで、この「ネンネ」に代るものを用意することができなかった。

そうしているうちに、幼稚園の三年保育に入園する日を迎えることになった。三歳九か月の頃である。明日が入園式という日、娘は、「明日から幼稚園ね」と、朝から何度となく歌うように、確かめるように、口にしていった。そして、突然「明日から幼稚園だから、ネンネを捨ててくる」と言いだし

た。団地のことで、近くに大きな焼却炉があった。娘は、そこに、自分で、大切な「ネンネ」を燃やしに行った。そんな事ができるのだろうか。それが成長なのだろうか。彼女は、大切なものを焼却することで何を得るのであるか。等々、私はしばらくは仕事も手につかず、子どもの持つ不思議な力に感動して坐り込んでしまった。

その夜は、さすがに、右手はまさぐる「ネンネ」を求め、左手も口の中に入れることは入れてみたりと、寝着くまでには相当の時間がかかったようだった。だが、その日から、もう夢中になって指をしゃぶることはなく、指の「タコ」もいつの間にか消えていった。

この二つのできごとを、私はことごとくに思い起す。子どもの成長には、ある日突然のように飛躍するときがある。そしてその日は、子ども自身が選ぶのではないだろうか。その日までには、ながい準備期間がある。この期間、ある時は苦しみ、ある時は惑う。この惑いに私はどれ程の助力ができるのだろう。ただ一緒に悩むだけのことも知れないと思うときがある。

○鉛筆削り

もう一つ、心に残る「飛躍のとき」がある。

今でこそ、鉛筆を電気に削らせるから、最近の子どもは無器用なのだと、ナイフが見直されているが、長女が一年生に入学する頃は、ナイフは危険であるということで、ナイフを学校に持って行くことは禁止され、教室にも鉛筆削りが置いてあった。

母親が雑学で子どもに対していたとしたならば、父親は哲学で対するのではないだろうかと思うことが度々ある。鉛筆削りもそうだった。父親は、鉛筆を削るというのは、農夫が農具の手入れをするのと同じだ、勉強をする前に、心をこめて鉛筆を削る、その時に勉強に対する心の準備ができる、だから、鉛筆はナイフで削りなさいと言うのである。勿論、一年生の子どもにその意を解することはできなかったにちがいない。だが長女が五年生になるまで、我が家に鉛筆削り器はなかった。

長女が五年生、十一歳の誕生日を迎える頃、誕生日のプレゼントに鉛筆削りを買って欲しいと注文した。そして、「バ

ペの言うことは分かるけれども、私の買う鉛筆はパパの鉛筆のように削り易い鉛筆ではない。一本の鉛筆を削るのに何回も芯が折れるから、時間がかかるし、机や手が汚れる。鉛筆もすぐに短かくなってしまう。だから、かえっていらいらして、パパの言うようには勉強に対する心がまえができないと思う。五年生になって鉛筆をよく使うから、毎日何本も削らなくてはならない。だから鉛筆削りを買って欲しい」というのである。

これが、長女が父親に対して真正面に立ち、自分の意見を堂々と表現した最初のできごとであった。その翌日、私達は電気鉛筆削りを買に行った。

○読書について

再び読書のことに戻る。今でこそ受験勉強をしながらも、文学書を手から離すことのできない長女も、幼児期から「本の好きな子」ではなかった。

三年保育に入園する頃、自分の名前だけは読み書きできるようになっていた長女も、文字に対して、さほどの関心があるわけではなかった。それが、入園して間もなく、字を教え

て欲しいと言いだした。なんでも、目次のシールを貼る園児ノートを、字の読める子どもは、配らせてもらえるのだと言う。だから、字を覚えたいと言うのである。こうして、長女の文字との付き合いが始まった。だが、文字に関心を持ったことからではなく、園児ノートを配りたいという願いから始まっただけに順調にはいかなかった。文字の多さに腹を立て、似通った文字のあるのに苛立って、もういい、と投げ出してしまったときもある。次女が、昼寝のとき読んで聞かせる絵本を、眠くないままにめくりながら、これは？　これは？　と、何度も何度も問いかけ、一字一字読み進み、これを一週間程続けるうちに全部覚えてしまったのと思い比べると随分時間がかかった。

これが原因になってか、長女の文字嫌いは相当長く続いた。小学校四年生の頃まで、童話は勿論のこと、絵本やマンガでさえも、ほとんど手にしようとはしなかった。だが、彼女には、生来のコトバに対する感覚の鋭さと、話の内容を把握する優れた能力が感じられた。

次女と二人テレビを観ていて、「あの人どうしたの？」とか「○○ってなに」と、次女はよく長女に質問する。長女は画面に見入りながら、間髪を入れずという感じで答えるのだ

が、それが実には的確で要を得ているのには、一度ならず驚かされた。

長女の真の本との出合いは『赤毛のアン』だと思う。あれ程夢中になり、一気に読んでしまった本は、それまでにはなかった。小学四年生の頃だった。それからの彼女の読書は堰を切った水のような勢いであった。少年少女小説を読み、『風と共に去りぬ』を読み、日本文学へと移っていった。『橋のない川』や、遠藤周作の『沈黙』は彼女の愛読書となり、高校生になってからは、本棚に美しい絵本も並ぶようになった。マンガもある。『ハイカラさんが通る』は、長女が高校を受験する頃、お小遣いで買い揃えたもので、面白いから読んでごらんと私にも進めてくれた。以来、長女と次女、そして私と、三人の愛読書になっている。

本を読むことにも一人一人のリズムがある。

次女は幼児の頃から三年生位までは、絵本や童話をよく読んでいた。だが以後中学三年頃まで、ほとんど読まなくなってしまった。木のぼり、鉄棒、自転車、野球、バスケット、日の暮れるのも忘れて、走り、跳び、動くことに夢中だった。

読書の大切さが云々される。母親が読書をするので、子

どもが本を読むようになるのだろうか。母親が子どもに本を読むように仕向けることができるのだろうか。本を読んで欲しいと願うことはできる。なによりも必要なのは、感動を与える一冊の本ではないだろうか。そして、一冊の本は、ひとりひとり、別の本なのだから、その本との出会いを待つしかない、そんな気がする。その出会いを経験した長女は幸せだと思う。

☆ ☆ ☆

以上、とりとめもなく、長女の成長を思い起してみました。そして、思い悩むばかりで頼りにならない母親であることを、あらためて自覚しているところです。

これからも、大学受験、就職、恋愛、結婚、出産と、娘達が悩み、私も悩むことが続くことでしょう。しかし、長女に関しては、自分の力で切り抜け、成長していくであらうと、そんな気がします。母親の直観です。